



現代のように美味しいお菓子がなかった昔は、お菓子の代わりに橘の実を加工して食べていたようです。そしていつしか、田道間守は菓子の菓祖神となり、全国銘菓奉獻祭が行われ、全国から銘菓の奉獻があります。

また、橘という「左近の桜と右近の橘」という言葉が浮かびます。京都御所の紫宸殿内部から見て、左の東側に桜、右の西側に橘が植えられています。諸説はあるものの、古来より常緑の橘は、松などと同様に「永遠」に例えられ、縁起のよいものとされ、万葉集に「橘は実さへ 花さへ その葉さへ 枝に霜降れど いや常葉の木」という聖武天皇の和歌があります。



風薫る白い花の香かな

撮影取材で出会った探訪記

第5話

尾道市文化財保護委員 尾道ユネスコ協会事務局長 村上宏治 写真家



「日本の柑橘の起源「橘」について訪ねました」

「非時香具菓」

西暦七〇年頃、第一代天皇である垂仁天皇の命により、不老不死の霊菓である「非時香具菓」を、常世の国で求めてくるように命じられた田道間守は、中国大陸へ渡り、十年間かけてようやく、その実を持ち帰りますが、すでに天皇は崩御した後でした。

御陵へ「橘入手」の報告の後に、「常世の国」の気候風土に似ている土地を探し求めて、熊野街道沿いの和歌山県海南市下津町橘本に六本の橘を植えました。そのこと



橘の発祥の地「橘本神社」
現在は柑橘や菓子業の祖として、田道間守命をお祀りしています。

が由来して「六本樹の丘」と名付けられたその場所は、みかん発祥の地として今に伝わり、その地区には、田道間守を奉祀する「橘本神社」が鎮座しています。

橘の古い呼称「非時香具菓」とは、いつでも香り高い果実という意味で、この「いつでも」というのが古代の人にとっては重要で「常緑の葉や、植物が枯れる秋から冬にかけて黄金色の実を付ける様子を誉め、生命力が宿る」と信じられていました。また、その葉が寒暖の別なく常に生い茂り栄える様子から、長寿瑞祥の樹として珍重されたといわれています。

余談ですが、こちらも諸説あるものの、左近の「桜」の「さ」は稲穂を表し、豊作をもたらす田の神様が宿る木と考えられ、「くら」は稲

の精霊が降臨する場所を意味し、磐座を表すともいわれています。

「桜」は旧字体では「櫻」と書きます。「嬰」の字には「めぐらす」とりまくなどの意味がありますが、この二つ並んだ「貝」の字は「子安貝の首飾り」を表しています。

「橘」は『古事記』にも「不老不死の理想郷に生える木」であり、また常緑低木であることから「長寿や子孫繁栄をもたらす縁起の良い木」として、ともに国の安泰を意味した願いがかけられているのでしょうか。



▶奈良時代に伝わった唐菓子的一种「清浄歡喜團(せいじょうかんだん)」。京菓子の中で、千年の昔の姿そのままに、今なお保存されているお菓子の一つ。(亀屋清永謹製)

後に、聖武天皇(西暦七〇一年〜七五六年)が「橘は菓子の長上、人の好むところ」と評されます。ここでいう菓子とは、食事以外の軽食にあたる食べ物全般を「くだもの」や「菓子」と呼んでいました。人の手を加えて作ったお菓子の原型は奈良・平安時代に輸入された唐菓子といわれています。江戸時代になると、加工して作る甘い食べ物「菓子」、みかんや柿など果実類のことを「水菓子」として区別して呼ぶようになります。

普段、繁々と観ることのない五〇〇円硬貨。ここにも橘の意匠をみることが出来ます。橘に願いを込めた日本の文化なのですね。



橘の

下吹く風のかぐはしき

筑波の山を恋ひずあらめかも

(訳) 橘の木の下を吹き抜ける風が香しく薫る筑波の山、あの山をどうして偲ばずにいられようか) 万葉集に所載されている、橘を題材にした和歌は、七十二首あります。



橘